

和歌山市下三毛

# 奥山田遺跡発掘調査概報

1982年 3月

和歌山県教育委員会

社団法人 和歌山県文化財研究会

## 序

奥山田遺跡は、県立和歌山高等学校建設に先立つ事前の分布調査によって発見された遺跡で、遺跡保護の目的から学校建設用地の選定に当たって除外された個所であります。

しかしながら、近年当該地域周辺の宅地化が急速に進み、本遺跡においても例外でなく、これらの開発に対処すべく発掘調査を実施したところであります。

その結果、古墳時代から鎌倉時代に至る遺構・遺物が多く検出されましたが、古代から中世にかけて営まれた遺跡としてはその範囲、保存状況等が良好で貴重な遺跡であります。ここに、その発掘調査の概報を作成いたしましたので、御活用いただければ幸いかと存じます。

最後に、発掘調査に当たり種々御協力をいただいた関係各位に厚くお礼申しあげます。

昭和57年3月

和歌山県教育委員会

教育長 高橋正司

## 例 言

- 1 本書は昭和56年度国庫補助事業として実施した奥山田遺跡の発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は和歌山県文化財研究会が実施した。調査は吉田宣夫が担当し上田秀夫、富加見泰彦が援助した。
- 3 本調査で奥山田遺跡の略称を I O Y とし、遺構は建物 (S B) 、溝 (S D) 、土壤 (S K) とした。
- 4 本書の作成は吉田があたり、北山裕子、大阪市立大学4回生積山 洋が補助した。
5. 調査組織

### 奥山田遺跡発掘調査委員会

#### 調査委員

鶴磨 正信 (和歌山県文化財保護審議会委員)  
巽 三郎 ( )  
都出比呂志 ( )  
藤沢 一夫 ( )  
畠村 半亮 (和歌山県文化財課長)

#### 調査員

吉田 宣夫 (和歌山県文化財課主査)

#### 事務局

事務局長 海野 正幸 (和歌山県文化財研究会事務局長)  
△ 次長 梅村 善行 (和歌山県文化財課長補佐)  
△ 幹事 桃野 真晃 ( ( ) 第2係長)

## 1 調査に至る経過

和歌山県教育委員会では和歌山市内における生徒の急増に伴って新設高校を建設する必要性が急務になり用地選定を急いでいた。その一つが奥山田遺跡の所在する地域であった。当時、遺跡は発見されていなかったが、分布調査を実施した結果遺物の散布が確認され、建設用地から除外された。この地域は通称奥山田と呼ばれている所から奥山田遺跡として取扱うことになった。その後遺跡の周辺は宅地化が激しくなり、当遺跡においても個人の宅地を建設する計画が出され、なお新たな開発も予想されるので、遺跡の確認調査を実施することになった。

## 2 遺跡の位置（第1図）(図版1-1)

当遺跡は和歌山市下三毛に所在する。紀の川中流域の南岸において紀の川と貴志川が合流する地点より標高250m前後の丘陵が西に延びて連なる。遺跡は茶屋御殿山より北に派生する尾根の先端に広がる標高25mの台地上に位置する。平地部との比高は約10m程になる。東西に連なる丘陵および裾部には多くの古墳群が所在し、西端には花山古墳群、岩橋千塚古墳群等の一大古墳群が築かれている。当遺跡の周辺には寺山古墳群、東国山古墳群、小山古墳などが丘陵麓部に築かれ、平地には上三毛、下三毛遺跡が所在する。

## 3 調査（第2図）

調査対象を台地全域とし、トレンチを16ヶ所（約200m<sup>2</sup>）に設定した。調査途中で当初の計画を変更し、最終的には12ヶ所（約250m<sup>2</sup>）の発掘調査になった。

**第1トレンチ** みかん畑で8m×2mの規模に設定、床土直下は黄褐色粘質土の地山となる。遺構は検出されず遺物も皆無に近い。

**第2トレンチ** 台地の西端で段々畑の最下段に8m×2mの規模で設定した。床土下は灰色の砂質土で土師器、瓦器の遺物を含む。その下は東側では黄褐色粘質土で地山と考えられる。西側は段状になって急に下る。下より青灰色粘土、黄灰色砂質土、黄灰色弱粘質土層が堆積している。これらの間にも土師器、瓦器の細片が含まれる。遺構の検出はなかった。

**第4トレンチ** 一段上の畑で6m×2mの規模で設定した。第3トレンチと状況はほぼ同じで灰色砂質土の下はすぐ地山になる。やはり土師器、瓦器の類を含むが遺構の検出はない。

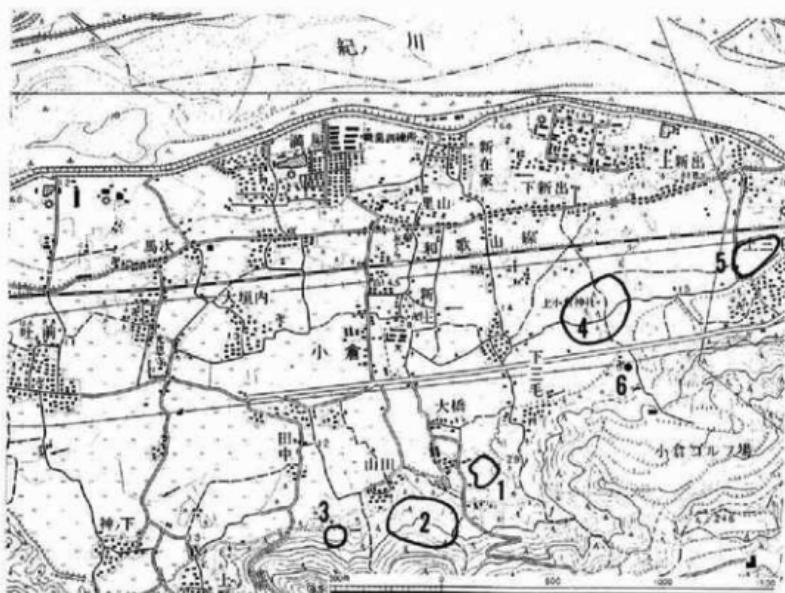
**第5トレンチ** 同じ畑で南へ15mの所に4m×2mの規模で設定した。床土下は黄褐色砂質土があつて地山になる。西方にかけて地山が下り暗灰褐色砂質土が堆積する落込みとなるが第2トレンチと似た状況で段幅を広げるために引きならしたものである。遺物は土師器、瓦器が出土する。遺構の検出はない。

**第9トレンチ** さらに上部の水田で南端に設定した。この地点は台地のほぼ中央に位置し最も広

く同じ高さの水田をも含めると南北 140 m、東西30mの広さを持つ。農道の北側は既に昭和55年に調査しているので、北側に10m×2 mのトレンチを3ヶ所に設け第9、10、11トレンチとした。床土直下は黄褐色を呈する地山となるが北端では灰色砂質土を含む落込みとなり第10トレンチに続く。遺構の検出はないが土師器、瓦器片が若干出土した。

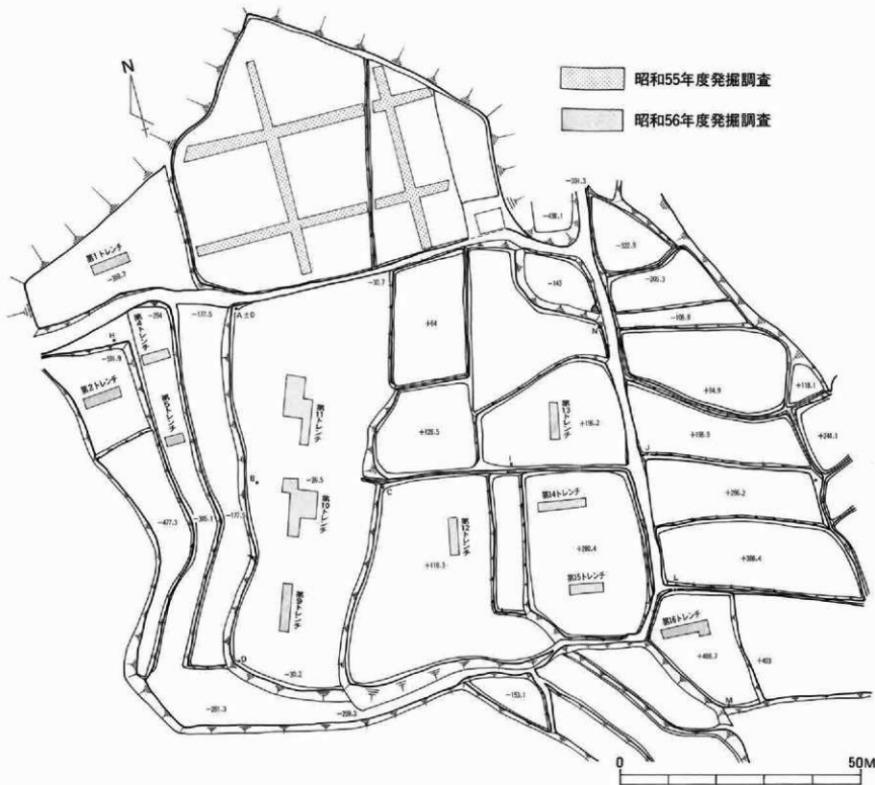
**第10トレンチ** (第3図)(図版1-2、3) 床土下は灰茶色砂質土、灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土が薄く堆積し土師器、須恵器、瓦、瓦器等を含む包含層である。この下層は地山になり遺構はこの面で検出される。柱穴11個を検出しSB-02は南北に1列、4間まで検出した。柱間はほぼ2 mである。拡張して掘広げたが建物の構造は不明である。柱穴より土師器、黒色土器が出土する。他に溝2条検出している。SD-02は石組の溝でSB-02の北に接し東西方向であるが、北端の柱穴の所で南に曲る。建物に伴う可能性がある。多量の黑色土器、土師器、須恵器を出土する。SD-03は東西の方向を持ち東側で二叉に別れる。削平を強く受けている。

**第11トレンチ** (第4図)(図版2-1、2) 灰褐色砂質土面において遺構が検出されるが、遺構の判別が困難なため地山面で検出せざるを得ない。SB-01は2間×2間まで確認でき、さらに

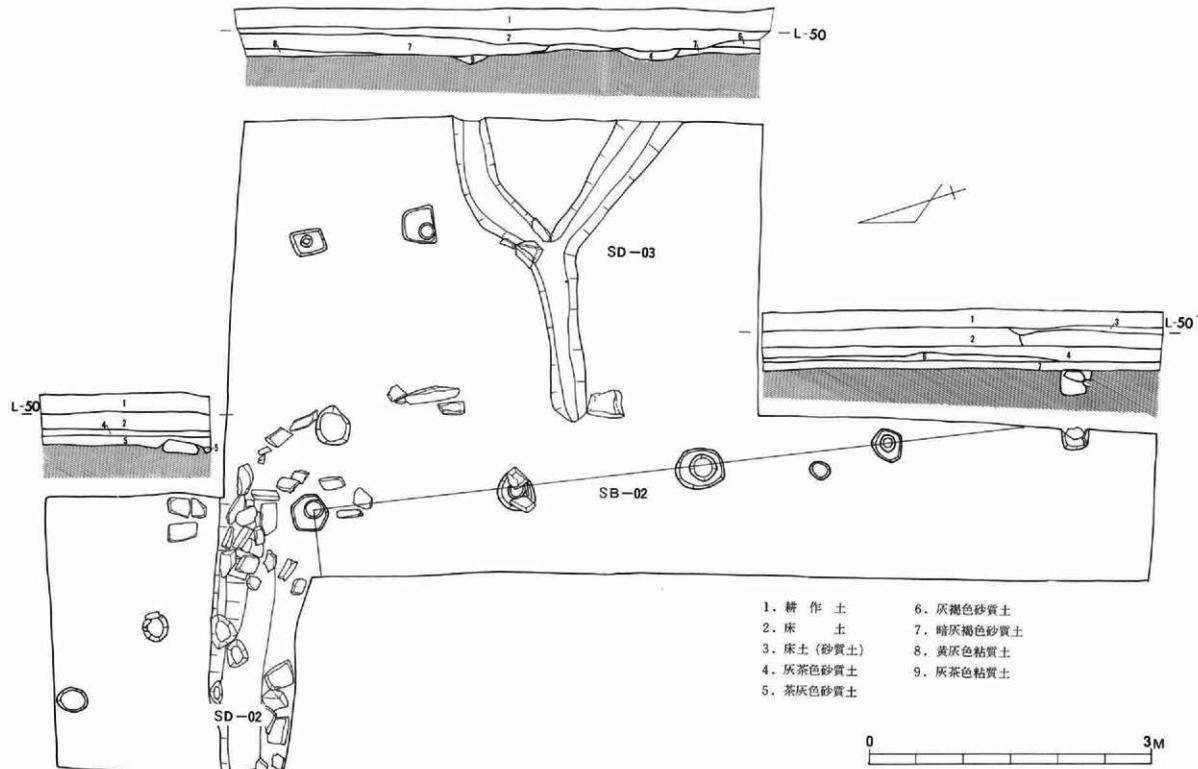


第1図 遺跡分布図

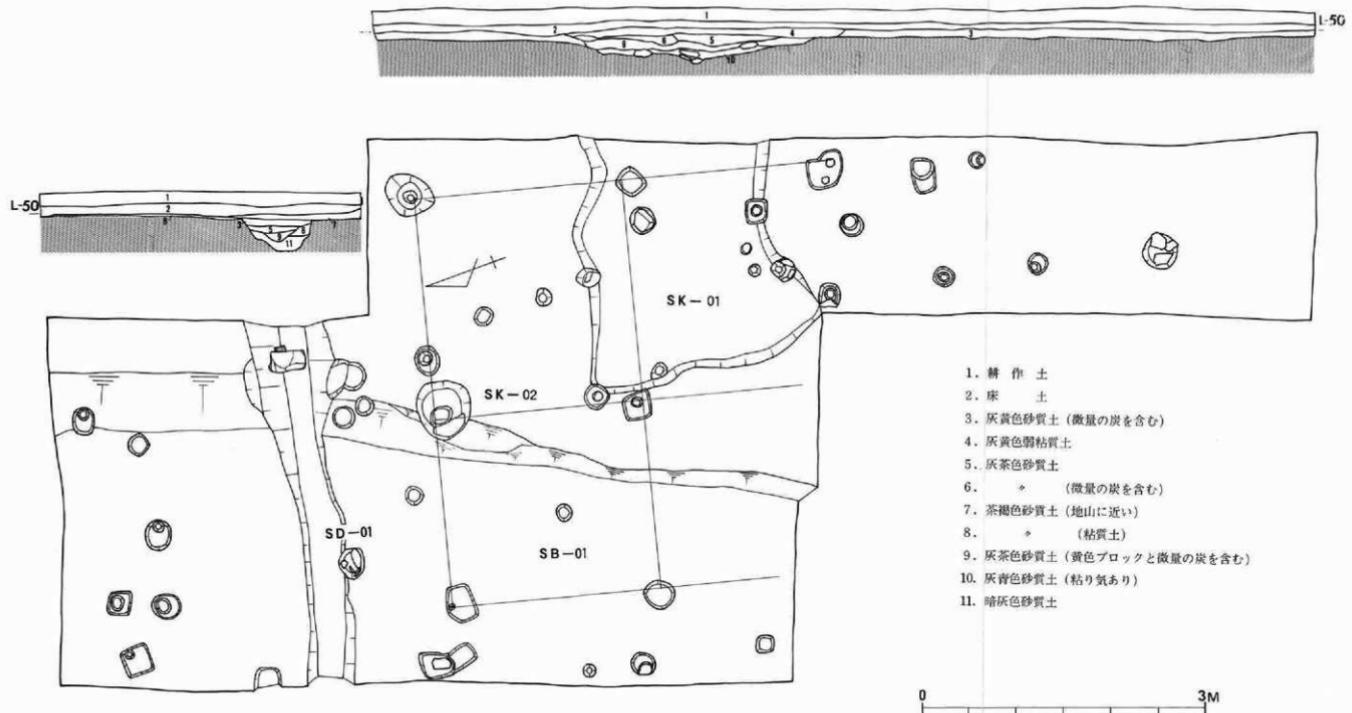
- |           |          |
|-----------|----------|
| 1. 奥山田遺跡  | 2. 寺山古墳群 |
| 3. 東国山古墳群 | 4. 下三毛遺跡 |
| 5. 上三毛遺跡  | 6. 小山古墳  |



第2図 発掘調査位置図



第3図 第10トレンチ遺構図および東壁土層図



第4図 第11トレンチ遺構図および東壁土層図

東西にのび、その方向に棟を持つ建物と考えられる（梁行1間2.3m～2.0m、桁行1間2.2m）。柱穴より土師器、瓦器、瓦、陶磁器類が出土する。SD-01は東西の方向を持つものでSB-01に伴うと考えられる。溝より土師器、瓦器、瓦等を出土する。SK-01は不定形ながら方形に近い掘方を持つもので土師器、瓦器、瓦を出土する。SK-02は径60cmの円形の掘方で多量の土師器、瓦器を出土する。

**第12トレンチ** さらに上段の水田で8m×2mの規模で設定した。床土下はすぐ地山で削平によるためか遺構の検出はなく、遺物も皆無に近い。

**第13トレンチ** (図版2-3) 当調査区も削平を受け床土下は地山である。柱穴6個を検出したがまとまらない。柱穴内より土師器が出土する。

**第14トレンチ** 第13トレンチ南側の水田に第14・15トレンチを設定した。床土下は地山まで3層の堆積土が認められる。瓦、土師器、瓦器を出土するが、遺構の検出はない。

**第15トレンチ** 床土下は第13トレンチと変わらないが、地山面で東西7m以上にわたる落込みと、西端でその落込みにこわされる土壌を検出した。土壌には遺物はほとんど含まない。落込み内には軒平瓦、土師器、瓦器が出土する。

**第16トレンチ** 最も高所で東端の水田に10m×2mの規模で設定した。東端で溝を検出、幅80cm、深さ35cmで南北に方向を持ち、南側の谷に向っている。遺物は少なく土師器、須恵器、瓦器片を出土する。

#### 4 遺 物 (図版3, 4)

遺物は全部でコンテナに10箱出土した。大きくわけて平安時代と鎌倉時代のものである。平安時代の遺物は第10、11、13-15トレンチで出土している。第10トレンチSD-02、第15トレンチ落込み出土遺物について記述する。1～4は黒色土器で1は高台の出は短いが安定している。底部から口縁部は内湾し、端部で肥厚する、片岩を含む。2～3は大ぶりの碗で2、4は八の字状の高い高台がつく、体部はヨコナデによる凹みが数条めぐる。5～9は土師器碗で黒色土器と器形、手法は同じである。5、8はややこぶりであるが変わらない。10、11は土師器皿で底部は指頭痕が残るがナデて平滑に仕上げている。口縁部にかけては碗類と手法は変わらない。図版-4の38は均正唐草文で右隅唐草平瓦である。これらは若干の時期差はあるが瓦および他の遺物よりみて11世紀前半のものと考えられる。鎌倉時代の遺物は全てのトレンチで出土するが、ここでは第11トレンチ出土遺物について記述する。12、14、16～20は体部に指頭痕を2～3段残し、口縁部内面はヨコナデで仕上げ、高台は断面三角形のものが多い。胎土は精良でその断面は灰白色である。内面には細かい暗文がやや雜であるが施されている。13も手法的には変わらないが高台が低くわずかに残るものである。15はやや小ぶりで外面に指頭痕を残し口縁部をヨコナデするのは変わらないが、内面の暗文は数条施され雜である。13、15は若干他の遺物より新しくなる要素を持っている。図版-4の1～5は瓦器の小

皿である。底部は指頭痕が残る。口縁部はナデによって段を持つ。胎土は精良である。6～35は土師器小皿で出土個体数は最も多い。瓦器小皿と製作手法は變らず底部に指頭痕を残し、口縁部をヨコナデし段を持つものである。16、23、36は糸切底で16は板目がつく。36、37は瓦器、土師器小皿と共に判するもので36は底部から体部にかけ指頭痕を一面に残す。口縁部はヨコナデで仕上げている。11は底部糸切で口縁部にかけてヨコナデである。39は滑石製で全面を磨き上部に円孔を1個穿つものである。13世紀代のものであろう。

## 5まとめ

昭和52年度の確認調査で柱穴、溝、土壙等の遺構を検出していたが、今回の調査でも同様な遺構、遺物の検出を見ている。遺跡の範囲を明確にするためトレンチを各所に設定し調査する必要があつたため、各々の遺構を断片的にしか把握できなかつたのは仕方のない所であったが、多量の遺物を検出し得たのは幸いであった。

調査の結果当遺跡は、この台地の全域に広がるが、第1～5トレンチの個所は斜面で遺構は存在しない。遺跡の中枢部を占めるのは第9～11トレンチを設定した地点である。又第16トレンチまで遺構は確認されるが、それより上部は山裾となって遺構は存在しないものと思う。平安、鎌倉時代の遺構、遺物を検出しているが平安時代は建物1棟以上と溝1条検出している。瓦片を多数出土しているため当然瓦葺の建物の存在を考えるが、S B-02は掘立柱で通常瓦を使用しないものとすれば据石を持つ建物が他に遺存している可能性もある。日本靈異記に弥氣の山室堂又は海草郡野上町に残る天平の大般若経の写経に御毛寺の記述が見られるところから、限られた範囲の台地上に瓦を使用する建物の存在を考慮すれば上記の御毛寺に相当する可能性の強いものである。ただ奈良時代の遺物が発見されていない現在、又限られた調査のため、それらの資料を充分満たさないため可能性を残すところが大である。

1. 奥山田遺跡全景  
南より望む



2. 第10トレンチ SB02  
北より望む



3. 第10トレンチ SD02



図版 2



4. 第11トレンチ SD-02  
東より望む

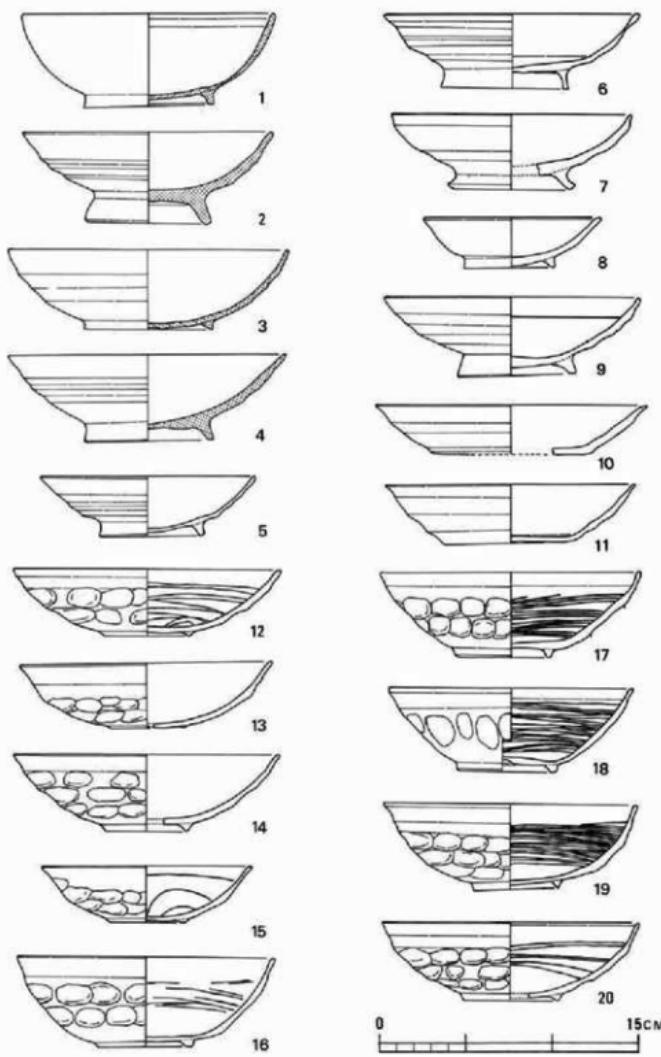


5. 第11トレンチ SK-01  
西より望む



6. 第13トレンチ 全景  
南より望む

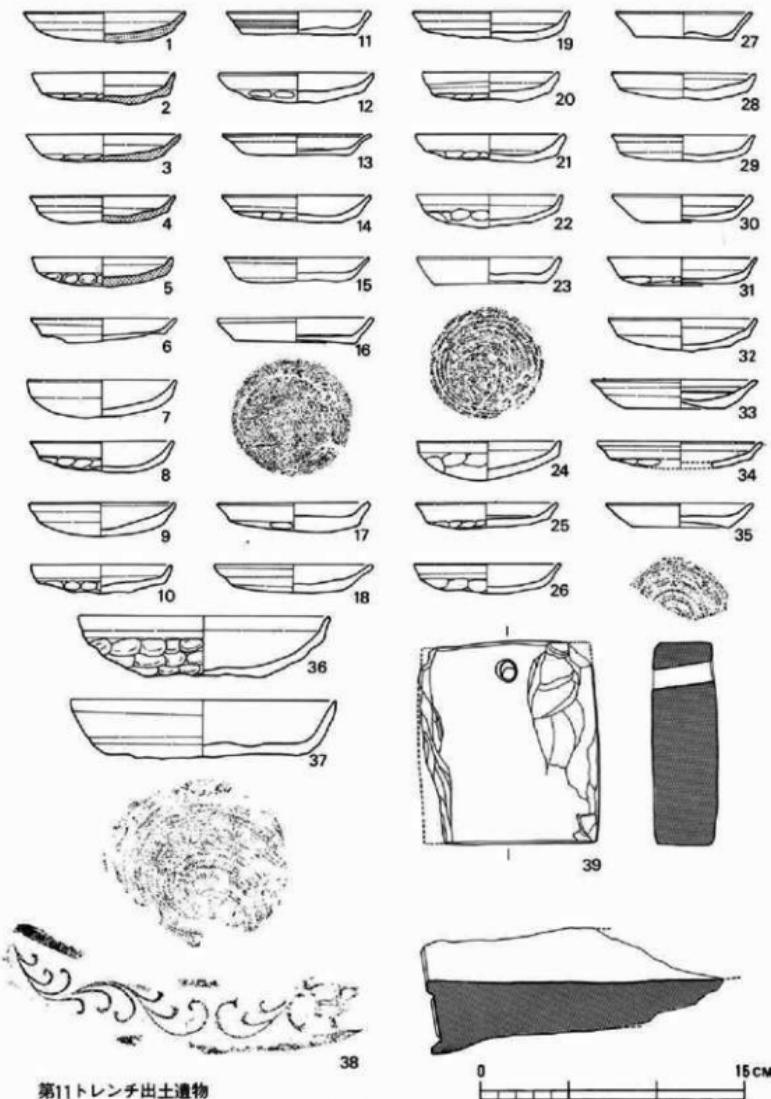
図版 3



第10トレンチ SD-02 1~7. 第5トレンチ第3層8.9 第13トレンチ 10.11

第11トレンチ SD-01.12 P-13.13 SK-03.14 P-39.15 SK-02.16.18~20

P-15.17



第11トレンチ出土遺物

SD-01.1.11~18.39. P-39.2.32 P13-3.27.30.31.37 SK-4.4.21~25 第3層灰  
茶色土5.9.10 SK-1 6~8.36 SK-5 19.20 P-48.26 P41.28 P-14 29.33.34.  
P-11.35 第15トレンチ出土遺物 北への落込み 38

昭和57年3月30日発行

## 奥山田遺跡発掘調査概報

編集 和歌山県教育委員会文化財課

社団法人 和歌山県文化財研究会

発行人 畑村半亮

印刷所 邦上印刷